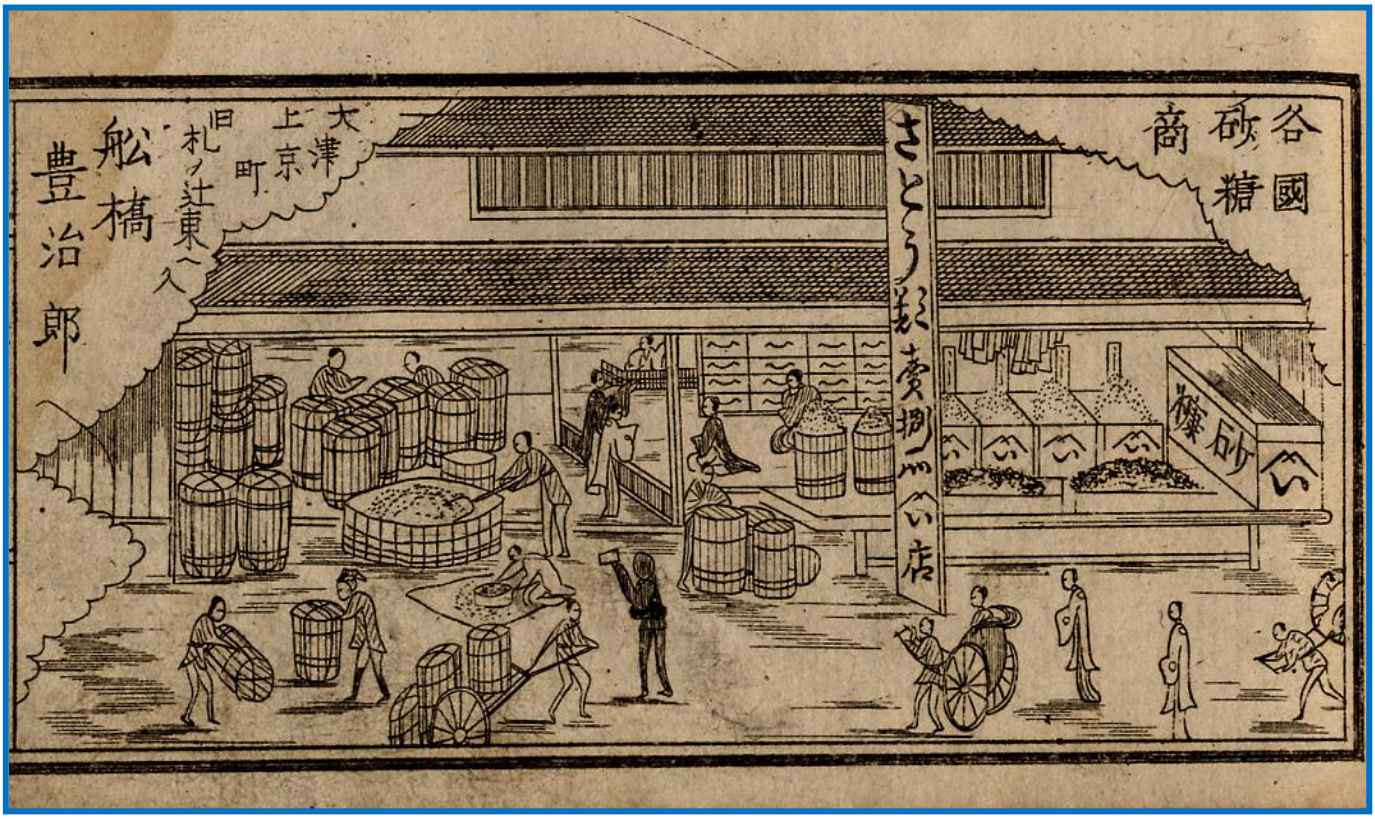
大津百町瓦版

大 津 ・ 町 家 ・ まちなか ・ いろいろ情報

新 年 号［No．４６］
２０２１年　１月

発行　大津の町家を考える会
大津市中央１丁目８－１３
TEL・FAX　077-527-3636
Email：otsu.machiya@gmail.com



『豪商銘工魁』（ごうしょうめいこうさきがけ）

旧大津百町は江戸時代には東海道随一の町であったことは、この『大津百町瓦版』でも何度か触れていますし、多くの方がご存じだと思います。

この町の賑わいは江戸時代から明治にかけて引き続き、多くの商店（酒屋・両替商・米穀商・干鰯屋・醸造業者）が業種組合を作り商いを繰り広げてきました。

鉄道も早くに京都―大津間に開通（明治事十三年[1880]）、びわ湖には蒸気船一番丸が塩津―大津間に就航（明治二年[1869]）、長浜間鉄道連絡船就航（明治十五年[1882]）びわ湖疏水による運河輸送（明治二三年[1890]）また、ロシア皇太子の大津訪問（明治二四年［1891］）なども、まさにびわ湖を要する中心都市大津だったからこそです。

明治十二年(1879)東京・大阪に続き、大津に全国三番目の商法会議所（現商工会議所の前身）ができました。

『琵琶湖涯商工産品録』

こうした大都市であるからこそ、明治一七年『琵琶湖涯商工産品録』という冊子が発行されました。これは大阪・堺の川﨑源太郎という人物が発行したもので、当時全国の主要都市でも同様な銅版画による図録を手掛けていたようです。

これは副題を『豪商銘工魁』と云い、最初に近江八景と三井寺の挿絵があって、大津百町内の商家や料理旅館、内国通運大津分社や太湖汽船といった会社など全五三軒分の店先の風景が精密な銅版画で紹介されています。

次ページでも銅版画による商店を掲載しています。商店としては残って無いかも分かりませんが、上図は船橋砂糖商店が詳しく書かれていますので、もしかしたらここのお宅かも？と分かることがありそうです。

【会員　雨森】

表紙の『豪商銘工魁』に続く銅版画の一部です。ここに掲載しています図は以前大津市歴史博物館にお願いし掲載の許可を頂いたものです。コピーのコピーで写りは悪く見難い部分が多いので、出来るだけ拡大してみました。

店先にいろいろ書かれている商品名を良く見ると面白いです。

上京町の『吉田常七商店』は東京小間物商として「羽織ひも品々」「珊瑚珠玉数品」「東京きせる」「金銀金物類いろいろ」まあ色んな小間物を売っていたのでしょう。

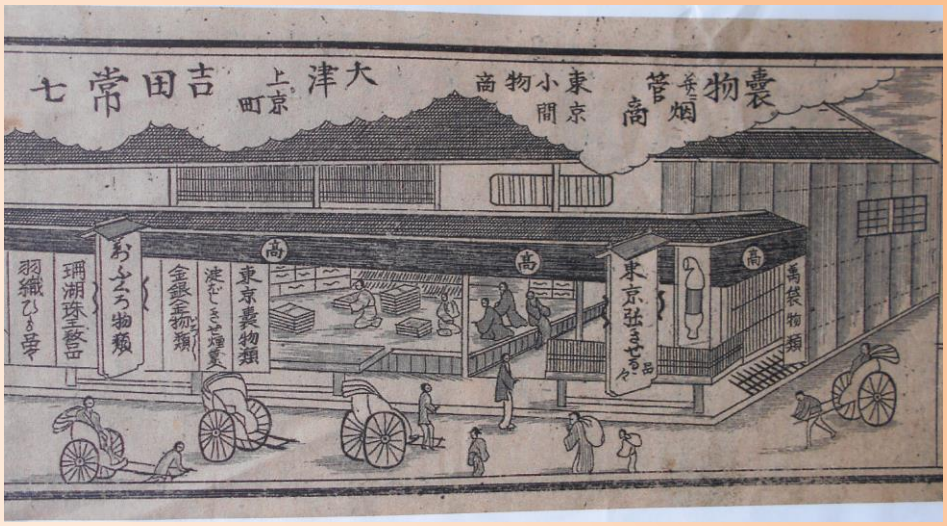
八丁上栄町の『岡村万次郎商店』は足装束類、旅に必要な物脚絆とかの物を卸しもするし小売もしていた。お店は八丁旅館街にあったようですから、よく売れたのでしょう。

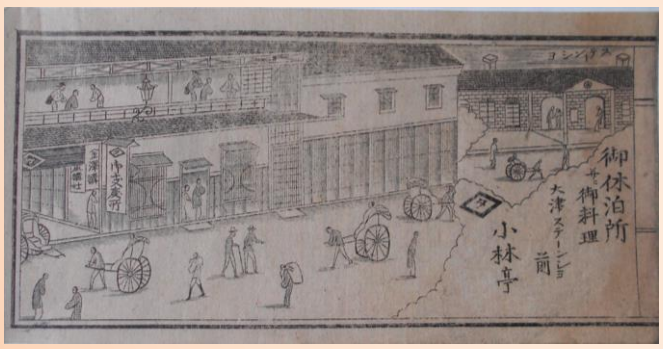
川口町の『清水伊平商店』は見ての通り川口堀(現川口公園)にあった米穀屋、問屋か小売屋かは分かりませんがきっと問屋だと思います。船から積み込まれる俵の量が半端じゃないし、物資の運送業も兼ねていたのですからね。

下の右は**『小林亭』大津ステーションヨ前**(旧国鉄初期大津駅)ですから、宿泊客も多く料理屋も兼ねており、「金澤講」の吊り看からみると金沢商人の定宿にもなっていたのですね。

船頭町の『伊東源兵衛商店』は洋鉄ハサミ(西洋ハサミ)とかはかり、さらに硝子燈品ですからランプシェードも扱っています。中庭のある大層立派なお宅ですね。

５３枚の絵は間口も大きく、人物の動きも細かく描かれています。





まちづくり『大津百町館』の近くにある中野家住宅は国登録有形文化財の建物です。以前は「中庄商店」という米問屋で、現在でもお家の表札は枡形の表札が掛っています。その住宅で高校まで住まいされていた中野正和さん(「大津の町家を考える会」の会員)が、ずっと以前にお父さんが新聞の取材を受けられた時(2003.6 武力攻撃事態対処関連三法に関し)の取材記事には、戦前の米問屋ことも書かれているのでと新聞記事[2003.5.29 朝日新聞/滋賀版]のコピーを持って来られましたので掲載いたしました。

またお父さんが話されていた話ですが「中庄商店にも昔は家の裏に櫓があって、そこから相場山(小関山)に相場の高下を送っていた」とのこともお聞きしました。

赤紙で召集されて、京都にあった歩兵連隊に 29 歳で入隊。１０ヶ月後の召集解除で自宅に戻ると、1942 年２月に制定されたばかりの食料管理法によって、祖父の代から受け継いできた米問屋が国に取られていました。食料と名が付くものは生産から配給までがんじがらめの状態。「殺生な」と思いましたが、個人ではどうすることもできない現実との直面でした。

店は明治３年(1870)に大津市の中心部で創業しました。当時から琵琶湖の浜は、船で米俵が運ばれると大勢の作業員が牛車などに積み込み、ひしめくようにあった各問屋に運ぶといった具合で、活気に満ちていました。

私の店も米俵を担いだ作業員らの出入りが頻繁で、取引は県外は京都市を中心に月１００俵(１俵 60 ㌔)以上ありました。店の奥の蔵には天候など不測の事態に備えて３００もの米俵を保管するときもありました。

大学を出た私は、父の下で販売や集金、自転車での配達を担当しました。三代目を継ぐ意欲に燃えて、日本一うまい近江の米を誇らしく思いながら売っていたのです。それなのに、不自由なく買えた米問屋が、店をとられた上に家族４人分の配給を受ける立場になったのです。商売などで付き合いの合った大勢の人から窮状を訴えられ、頼られても何もできなかったのはつらかったです。

その後、問屋時代からの付き合いで農業系団体の職員となり、二度目の召集では転勤先の東京からニューギニアへ渡りました。現地では食糧の買い付け、配給などの担当でしたが、マラリアや赤痢などで無くなっていった多くの仲間の姿を忘れることはできません。

「国のために」と強制された一つの法律で、強制的に個人の権利が侵害され、「おかしい」と主張する自由さえも奪われました。国民のための法律は、人の命や財産を奪ったり、制限したりするものではないはずです。今、外務省をはじめとして国の機関の職員は「相当の教育」を受けたはずの人なのに、日本や周辺諸国の状況を考えずに行動している、と映ります。時代を戻してはいけません。

編集後記　最近の「大津百町瓦版」の記事内容は二回連載の旧大津町名の事、江戸の酒造業者の話、そして前回の湖岸に立ち並ぶ米蔵と旗振り通信の事など、読者の方々から感想や評判をお聞きして喜んでいます。これからも読まれる瓦版を目指します。　［K. A］

大坂茨木の相場山 旗振り通信網

この瓦版前号の「秋季号」で特集しました、江戸時代浜通りの蔵屋敷と米屋仲間株の話に加えて、表紙トップに小関山の相場山（相庭山）について掲載しました。

十一月六日付の毎日新聞夕刊に左写真の様な記事が茨木高原カントリークラブ、クラブハウスの玄関前にひさしに届きそうなほど大きな碑があるそうです。

そこには「米相場　京え知らすに旗振りし　ここが昔の相場たて山」と刻まれているそうです。

さらに記事には、江戸中期には大坂の米相場は全国基準になっており、堂島米会所の相場情報の伝達には飛脚が使われた。しかし商人は大もうけにも、大損にもつながる情報は一刻もはやく得たい。そこで活躍したのが、前号表紙に掲載した手旗信号による旗振り通信でした。

また山上では黒旗を、低地で背後に障害物がある場合は白旗を使い、快晴時は小旗、曇天時は大旗が振られたとあり、神戸市・須磨や大阪・交野市には「旗振山」と直接名前のついている山もあったようです。

きょうは何の碑

米相場中継場

大阪・茨木市と豊能町の境にある山・石堂ケ岡（標高680・1㍍）。今はゴルフ場・茨木高原カンツリー倶楽部の敷地になっている。クラブハウスの玄関前に、ひさしに届きそうなほど大きな碑が。「米相場　京え知らすに旗振りし　ここが昔の相場たて山」と刻む。裏には「堂島米相場中継場跡地」と。かつて、

米相場を旗振りで伝える石堂ケ岡中継場があったことを伝える碑＝大阪府茨木市で

「早く」「遠くへ」　旗振り通信網

この山で米相場を伝達する旗が振られていたのだ。

江戸中期には、大坂の米相場は全国基準になっていた。電話や電報などない時代。堂島米会所の相場情報の伝達には飛脚が使われた。だが、1日以上かかることも。商人は一刻も早く情報を得たい。大もうけにも、大損にもつながるのだから。活躍したのが旗振り通信だった。

堂島米会所から手旗で発信される相場情報を、見通しのよい場所にいる通信員が望遠鏡などで確認し、リレー形式で各地に伝える。「明治大正大阪市史」などによると、山上では黒旗を、低地で背後に障害物がある場合は白旗を使い、快晴時は小旗が、曇天時は大旗が振られた。通信内容を盗み見られた場合の対策なども施しつつ、伝達速度を高める努力が続けられた。電話の本格普及により、大正期で役割を終えた。

旗振り場（中継場）は、神戸市・須磨や大阪・交野市の「旗振山」のように山の名前がつくほど、地域でよく知られていたようだ。旗を振る通信員の姿が印象的だったのか。

さて、石堂ケ岡山頂を目指す。フロントの方の案内で登り口へ。2分足らずで1等三角点がある場所に着いた。木立に囲まれ、大阪平野も京都方面も見えない。大阪の町並みは下って開けた所から見えたが、かすんでいた。空気がきれいだった昔のようには見通せないのだ。

瞬時に世界の情報が得られる時代になった。より早く情報を、という先人の貪欲さがあればこそ。【相原洋、写真も】

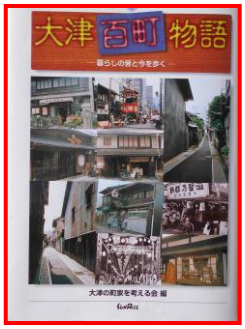
大津の町家を考える会が二冊目の町家本を出しました

「百町物語」から２０年
大津の町家とまちを振り返る

『大津の町家を考える会』の結成(１９９７)間もない 1999 年４月に「大津百町物語」をサンライズ出版から発行しました。

この本は好評で何回かの重版を得て現在は絶版となっています。

町家を考える会は 2001 年６月に大津・丸屋町商店街にある空家を借りて市民参加型での改修工事を行い『まちづくり大津百町館』として再生オープンさせました。



【大津百町物語】

大津百町館は明治３２年建築の大店のお店であった建物、大津には築 100 年～150 年の建物はありますが、見学出来るのは百町館だけです。

今回は『まちづくり大津百町館』の開館から２０年になる節目に先の「大津百町物語」の続編を発行しようとなって、昨年１１月に大津の町家をふりかえる右の様なＡ４版４０ページの冊子を発行しました。同月２６日記者発表を行い新聞数社の滋賀版に記事が掲載されました。

大津の町家、町並の２０年が込められた今回の冊子を是非手に取って見て下さい。『まちづくり大津百町館』で印刷実費￥３００で扱っています。

【大津の町家とまちを振り返る】

各社新聞でも紹介されました

気になるお店

喫茶店 〝manma〟

以前、保育園長をされていた西田久美子さんが、地域のお母さんやお年寄りの集いの場を設けたいと思って、令和二年二月二二日に店とみんなの広場「manma」を始められました。場所は、三井寺観音堂に上る階段近くの元三井寺南別所の両願寺のあった所です。長く放置されたお堂をきれいに改築されてオープンされました。

もともとお堂にあった格子窓や蔀（しとみ戸）も残されていて、すごくいい雰囲気です。

二月に開店して４月、５月はコロナでお客が無くて困られたのでは？とお聞きすると、学校が休校だったりしたので、地域の子どもさんやお年寄りが散歩の途中に寄ってもらえたりして、地域の人々の集いの場になっていたとの事です。

ずっと空きお堂になっていたので、この喫茶店ができて、地域の人から集える場が出来たと喜ばれているそうです。お堂の部分や庭を使って、時々イベントをやっておられます。

メニュー：飲み物（コーヒー￥４００）
ランチプレート￥１０００等々

開店日：毎日　定休日：月・火曜日

営業時間：一０時～一七時

住所：三井寺町一一―五

電話：０９０　１８９４　７４７９

駐車場有　一七時以降貸室可能

モットーは であい・くつろぎ・あそび